

藤原京右京七条二坊、四分遺跡の調査

—第192-2次

1 調査の概要

本調査は、橿原市飛騨町内における住宅建設にともなう事前調査である。調査地は飛鳥川右岸に位置し、藤原京右京七条二坊東北坪にあたるとともに、弥生時代の拠点集落である四分遺跡の範囲にある（図111）。

本調査区西方の第41-3次調査区（1984年度）では藤原京期の南北堀を、南方の第54-13次調査区（1987年度）では南北堀等を、第78-9次調査区（1995年度）では、六条大路の両側溝を検出している。また、本調査区北西方約10mの第29-7次調査南区（1980年度）では、弥生時代中期の土坑と後期の北西-南東方向の斜行溝を検出しており、本調査区でも藤原京期と弥生時代の遺構の存在が予想された。

調査は宅地造成予定地の敷地中央部に南北35m、東西3.5m、面積122.5㎡の調査区を設定しておこない、2017年6月1日に開始し、6月27日に終了した。

2 基本層序

調査地の基本層序は、上から順に造成盛土、耕作土、いわゆる床土と続き、地表下約1.8mで黒褐色粘質土に至り、その下層は黄褐色粘質シルトとなる。黒褐色粘質土は弥生時代中期の遺物を包含し、弥生時代後期の遺構はこの黒褐色粘質土上面で検出した。また、弥生時代中期の遺構は黄褐色粘質シルト層の上面で検出した。

今回の調査区は地形が北へと傾斜して行くため、遺構検出面の標高は南端と北端とでおよそ30cmの差がある。なお、調査区北辺付近の一部は、後世の攪乱により黄褐色粘質シルト層まで削平されていた。

3 検出遺構

検出した遺構には、弥生時代の溝、掘立柱建物、柱穴列、斜行溝、土坑がある（図112・113）。なお、藤原京期の遺構は残存していなかった。

弥生時代中期の遺構

建物SB11473 調査区北部で検出した桁行2間、梁行1間の南北棟建物。柱間寸法は桁行、梁行とも1.1m。

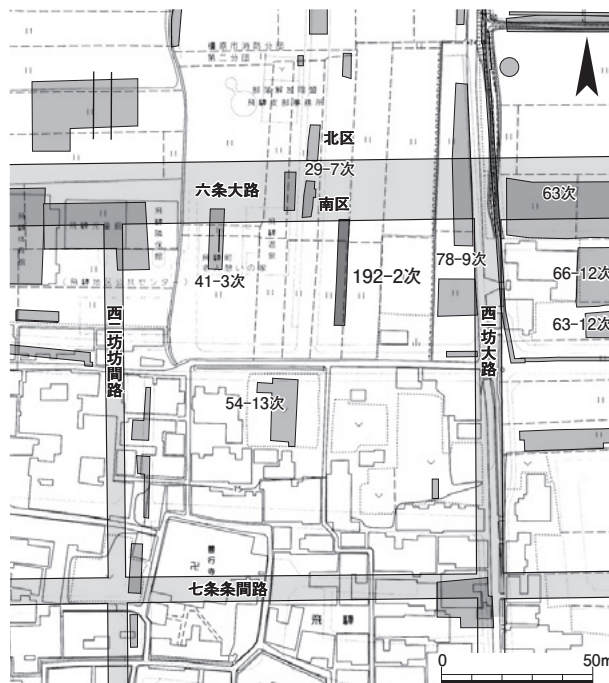


図111 第192-2次調査区位置図 1:2500

柱穴は直径0.3～0.4mで深さは0.4m。北で若干東に振れる。調査区外の東ないし西に延びる東西棟建物の一部となる可能性がある。

柱穴列SA11472 調査区北部で検出した南北に3間分並ぶ柱穴列。柱間寸法は1.2m。柱穴は直径0.3～0.4m。北で若干東に振れる。堀ないし柵列、あるいは調査区外の東ないし西に延びる南北棟建物の側柱列となる可能性が考えられる。

柱穴列SA11474 調査区中央部で検出した南北に2間分並ぶ柱穴列。柱間寸法は2.0m。柱穴は楕円形ないし隅丸方形を呈し、直径約0.6m、深さ0.5m。北で若干東に振れる。堀ないし柵列となる可能性もあるが、他の柱穴より規模が大きく、柱間が広いことから、調査区東側ないし西側にのびる東西棟建物の妻柱列となる可能性もある。

柱穴列SA11476 調査区南部で検出した南北に3間分並ぶ柱穴列。柱間寸法は1.2m。柱穴は直径0.3m程度。北で若干西に振れる。重複関係からSD11481より新しい。堀ないし柵列、あるいは調査区外の東ないし西に延びる南北棟建物の側柱列となる可能性が考えられる。

斜行溝SD11481 調査区南部で検出した南西-北東方向の溝。重複関係からSA11476より古い。幅0.2～0.3m。埋土からイネの可能性がある圧痕が胴部下半につく壺形

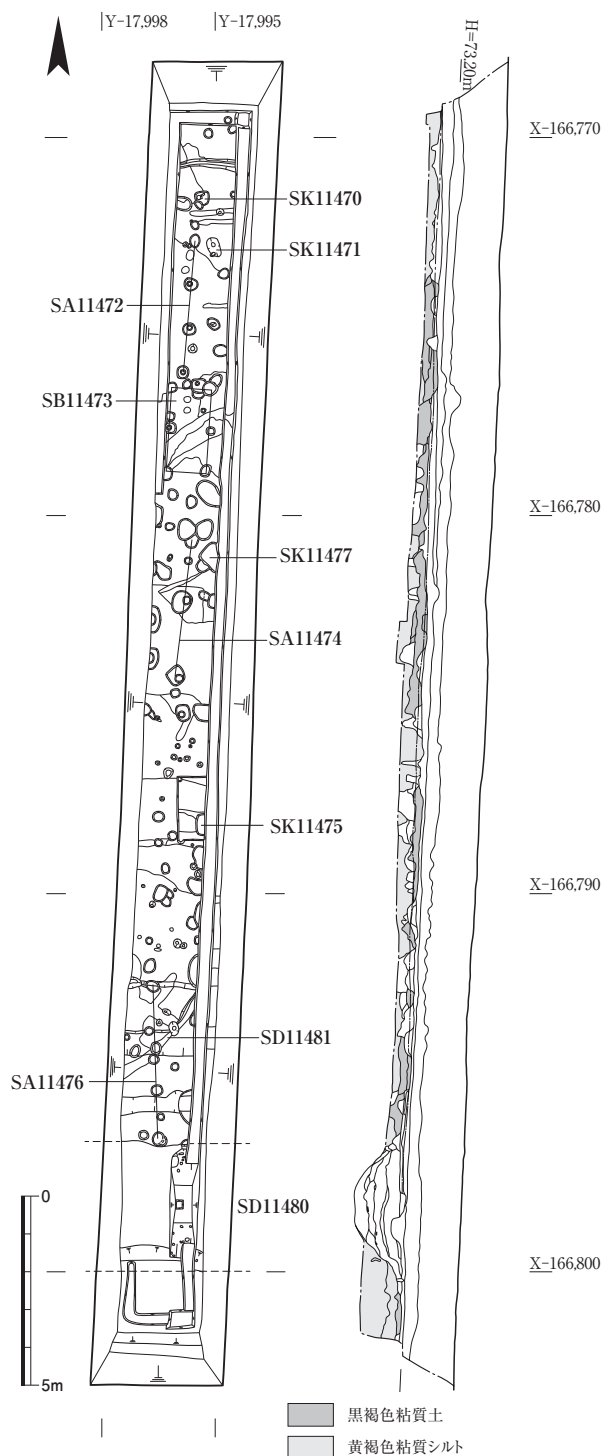


図112 第192-2次調査区遺構図・東壁土層図 1:200

土器の底部が出土した。

土坑SK11471 調査区北部で検出した楕円形の土坑。長径0.6m、短径0.3m。弥生時代の土器・大型打製尖頭器が少量出土した。



図113 第192-2次調査区全景（北から）

土坑SK11475 調査区中央部で検出した隅丸方形の土坑。一辺0.6m。埋土上部から弥生時代の土器が出土した。
土坑SK11477 調査区中央部で検出した隅丸方形の土坑。一辺0.6m。弥生時代の打製石鏃が出土した。

弥生時代後期の遺構

溝SD11480 調査区南辺で検出した東西溝。幅3.0m、深さ1.3mで、調査区外の東西へと続く。断面形状は台形を呈する。埋土上層は暗茶褐色粘質土で、下層は黒色粘質砂である。弥生時代中期後葉までの遺物を包含する黒褐色粘質土層の上面で検出した。弥生時代中期以降に掘削され、後期後半には埋められたと考えられる。中期中葉と後期後半の土器、石器などが出土した。

土坑SK11470 調査区北部で検出した隅丸方形の土坑。一辺0.4m、深さ0.2m。埋土は黒色砂質土で、完形の長頸壺が出土した。

このほか、弥生時代中期もしくは後期に属すると思われる柱穴・小穴を多数検出したが、調査区が狭く、建物もしくは塀として組み合うか否か特定できなかった。

（清野孝之・張 祐榮／韓国国立慶州文化財研究所）

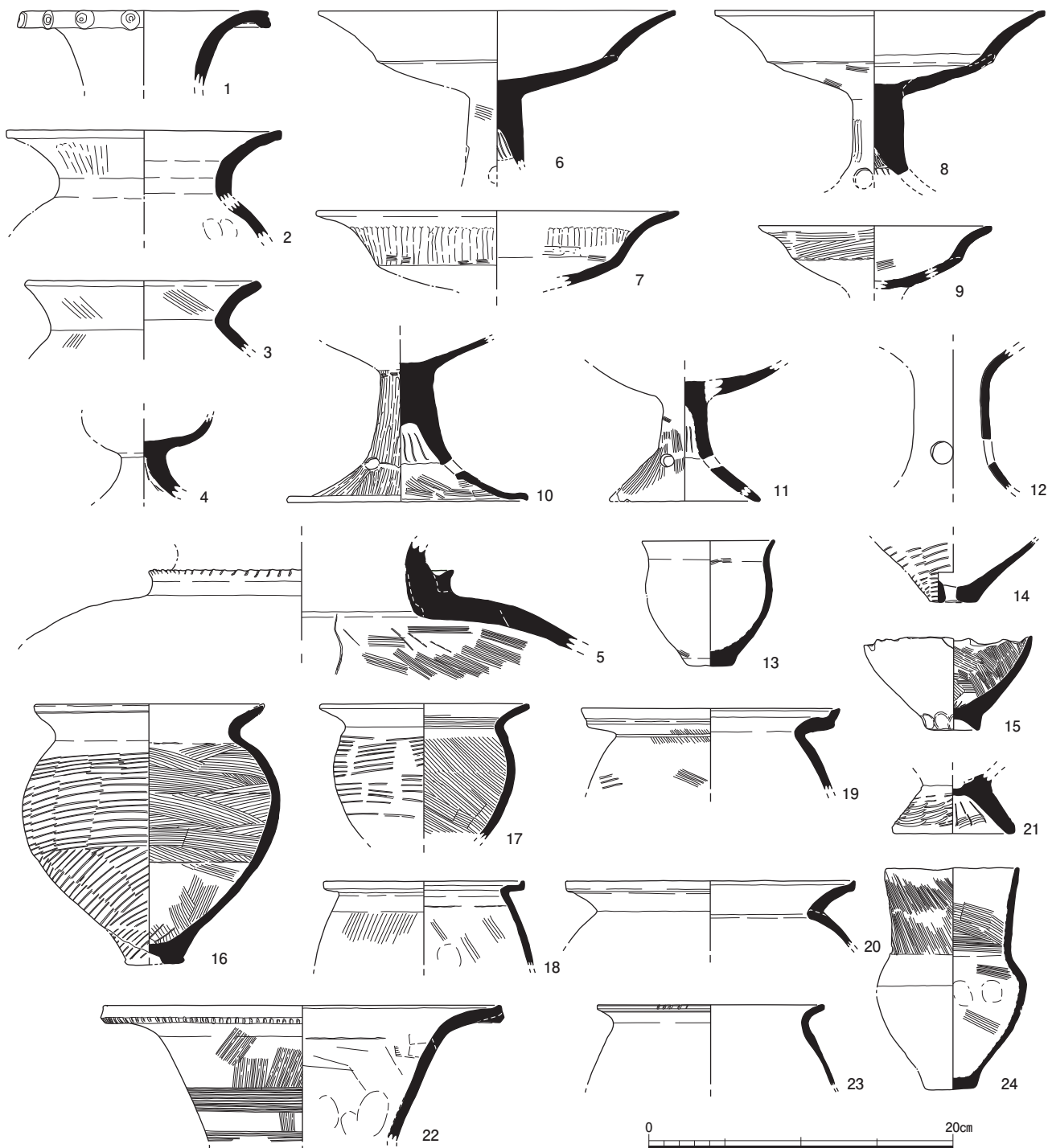


図114 溝SD11480 (1~21)・土坑SK11475 (22・23)・土坑SK11470 (24) 出土土器 1 : 4

4 出土遺物

土器・土製品

整理箱に19箱分の土器が出土した。弥生時代中期中葉と後期後半の土器が大半を占める。

SD11480出土土器 弥生土器が整理箱に9箱分出土し

た(図114)。壺(1~5)・高杯(6~11)・器台(12)・鉢(13~15)・甕(16~21)があるが、タタキ成形した甕が目立って多い。壺には、広口壺(1~3・5)と脚台付の小型壺(4)がある。1の口縁端部には円形浮文、4の脚部には3方向の透し孔がある。5には、頸部と胴部の境界に凸帯を貼り付け、凸帯上に刻目を施す。有稜高杯(6~9)は、

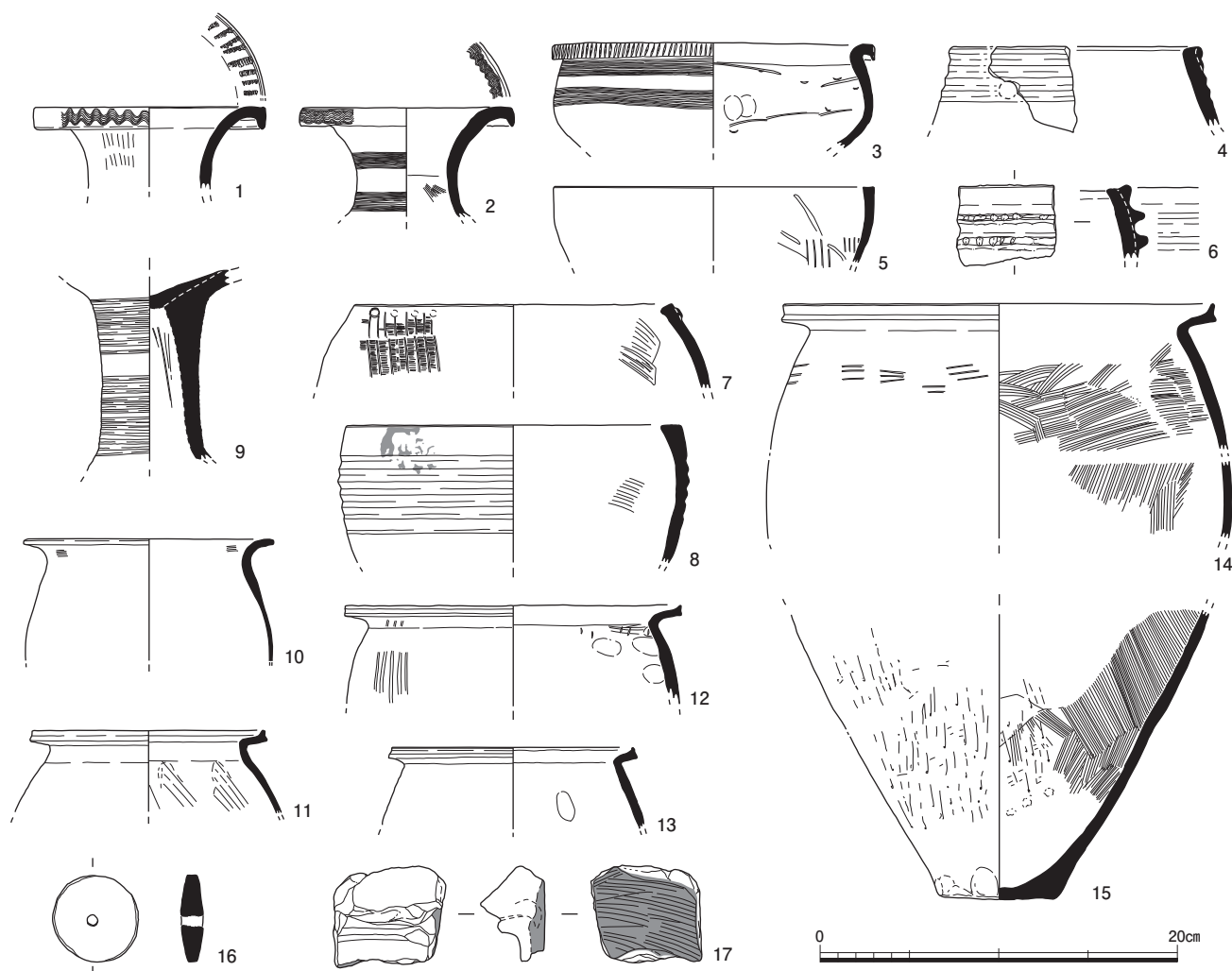


図115 黒褐色粘質土出土土器・土製品 1 : 4

杯部の稜から口縁端部までの幅が広く、口縁部は強く外反する。10・11の高杯脚部には、3方向の透し孔がある。12は小形の器台。鉢には、外面に右上がりタタキを施した有孔鉢（14）と無文のもの（13・15）がある。甕のうち、16・17の胴部上半にはいずれもわずかに右上がりのタタキを施すが、下半のタタキは方向性が異なる。18は、口縁部形状が後述の黒褐色粘質土出土品と共通することから、溝の埋没過程で紛れ込んだものか。19は受口状口縁の甕。21は右上がりタタキが施された甕台脚。SD11480出土土器は、タタキ成形の甕が主体を占めていること、甕の胴が球形化していること、台付甕が存在すること、有稜高杯の口縁部が長くて強く外反することなどから、弥生時代後期後半に位置づけられる。

SK11475出土土器 弥生時代中期中葉の広口壺（22）と甕（23）が出土した（図114）。いずれも口縁端部に刻目を施す。

SK11470出土土器 弥生時代後期後半の長頸壺（24）が出土した（図114）。内面の胴部上半を横位ハケで調整する。胴部内面に指頭圧痕が残る。

黒褐色粘質土出土土器・土製品 弥生土器と土製品が整理箱に2箱分出土した（図115）。壺（1・2）・鉢（3～8）・高杯（9）・甕（10～15）がある。壺は、いずれも口縁端部に櫛描波状文を施した広口壺で、1には内面口縁部に刺突文、2には外面頸部に櫛描直線文、内面口縁部に櫛描波状文がある。鉢には、櫛描直線文（3）、凹線文（4・8）、刻目突帯文（6）、簾状文と円形浮文（7）を施したもののほかに、無文（5）のものがある。高杯には、脚柱部に櫛描直線文をめぐらすもの（9）があり、杯部と脚部の間に円板を充填する。甕には、口縁端部を上方に拡張し、外端面に凹線文状の凹みをめぐらすもの（11～14）と、口縁端部が丸いもの（10）がある。15は内面に炭化物が付着する。黒褐色粘質土出土の土器群は、櫛

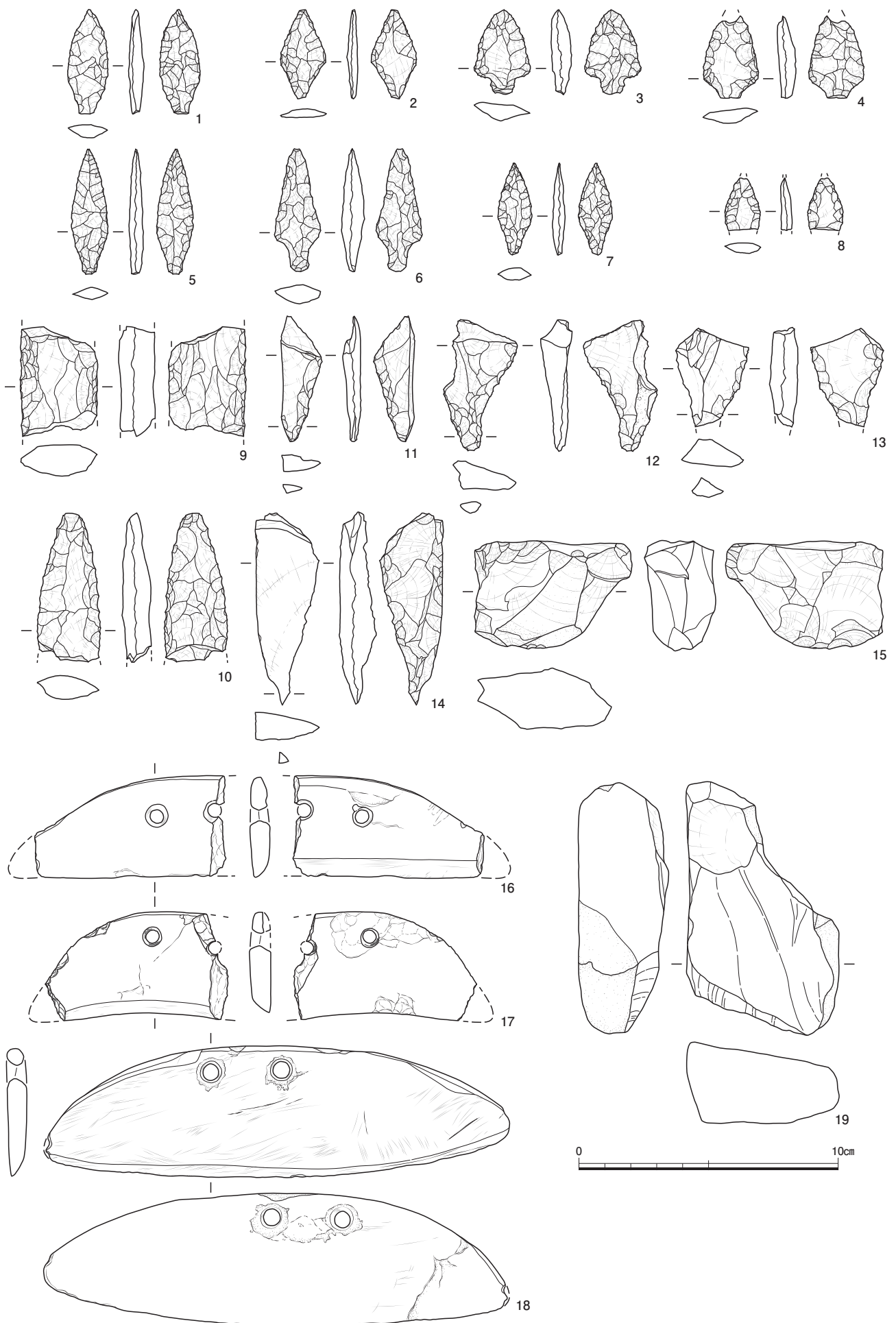


図116 第192-2次調査出土石器 1 : 2

描直線文と凹線文が混在していることや甕の形状から、弥生時代中期中葉のものが主体を占めていると考えられる。

16は、土製紡錘車。重量は27.5 g。17は、被熱痕跡のある不明土製品。長さ5.9cm、幅5.5cm、厚さ3.9cmの破片で、ハケ目を施した面が被熱のため表面から約6mmにわたって黒色に変色している。土製鋳型外枠ではないかとも考えられるが、破片が小さく断定しがたい。鋳型であることを示す付着物の有無を確認することを目的として蛍光X線分析をおこなったが、黒色変色部と胎土との間に有意な差異は認められなかった（分析は柳成煜による）。（張）

石 器

図116の1～8はサヌカイト製の打製石鏃。1・2は凸基式、3～7は有茎式。いずれも鏃身部は、深い調整剥離の後、浅い調整剥離をおこなう。茎部は、調整剥離の方向を変えて作り出す。1は片面に大剥離面が残存。完形。2.95 g。SD11480出土。2は調整剥離が一部およんでいないことから未成品か。完形。1.86 g。SK11477出土。3・4は幅が広い形態。3は完形。4.35 g。SD11480出土。4は先端部を欠く。3.97 g。黒褐色粘質土出土。5・6は細身で大型の石鏃。5は完形。3.09 g。黒褐色粘質土出土。6は完形。4.79 g。SB11474出土。7は小型で軽量のもの。完形。1.74 g。中世以降の耕作溝出土。8は先端および基部欠損のため型式不明。浅い調整剥離によって鏃身部を加工する。1.13 g。SD11480出土。9・10はサヌカイト製の大型打製尖頭器。9は体部の一部か。粗い調整剥離の後、浅い調整剥離で刃潰しをおこなう。破面に多方向の加圧痕が残る。黒褐色粘質土出土。10は尖頭部。基部を欠く。粗い調整剥離を全面に加えた後、尖頭部および刃部を浅い調整剥離で作り返す。SK11471出土。

11～13はサヌカイト製の石錐。11・12はほぼ一定の幅の石錐。11は片縁全体ともう一方の縁の錐部の片面に調整をおこなう。それ以外の部分は大剥離面が残存。錐部は磨滅。完形。4.67 g。中世以降の耕作溝出土。12は一部に白い風化面がみられる。錐部のみ深い調整剥離をおこなう。錐部の調整が弱く鋭利ではないため、未成品か。完形。8.58 g。SD11480出土。13は涙滴形。錐部の先端を欠く。一面のみ白い風化面がみられる。片縁のみ両面に調整剥離をおこない、錐部は深い調整剥離の後、浅い調整剥離を加える。9.23 g。黒褐色粘質土出土。14はサ

ヌカイト製の削器。断面形状は三角形。各面はそれぞれ白い風化面、大剥離面、加工面である。刃部は深い調整剥離の後、浅い調整剥離を加える。完形。21.01 g 黒褐色粘質土出土。15はサヌカイトの石核。白い風化面が一部に残存する。SD11480出土。

16～18は蛇紋岩製の石庖丁。形状は直線刃半月形の片刃。16の紐孔は両面穿孔。刃部には横方向の擦痕が多数ある。中世以降の耕作溝出土。17の紐孔も両面穿孔。刃部は内湾している。黒褐色粘質土出土。18の紐孔は孔周囲の様相から、敲打後に両面穿孔をおこなう。刃部のある面に横方向、一部縦方向の擦痕が多数ある。光沢は全面におよぶが、刃縁周辺の光沢が強い。完形。SD11480出土。19は蛇紋岩製の砥石。欠損部とみられる面にも研磨が強い部分がある。特に研磨の強い部分は、光沢を帯びる。黒褐色粘質土出土。

このほか、調査区内全面からサヌカイト剥片が多量に出土した。（土橋明梨紗）

5 ま と め

今回の調査では、藤原京期の遺構は残存していなかったが、弥生時代の遺構について重要な成果を得た。四分遺跡は飛鳥川右岸における弥生時代の拠点集落であり、今回の調査区は集落の東南部にあたるものと考えられる。従来調査があまり進んでいなかった四分遺跡東南部の様相解明の手がかりを得た点は、貴重な成果といえる。

溝SD11480からは、弥生時代後期後半の土器が出土した。溝のごく一部しか調査していないため不明な点はあるが、第29-7次調査南区で検出した弥生後期後半の北西-南東方向の斜行溝SD2918との関連が考えられる。また本調査区東（第62・63-12次）では南東から北西方向への自然流路を確認しており、本調査区の周辺にも同様の旧流路が存在した可能性がある。こうした従来の調査成果を参考にと、今回検出した溝SD11440は、流路から水を集落に引き込む溝か、集落を区画する環濠または集落内部を区画する溝の可能性が考えられる。今後の周辺の調査をふまえ、さらに検討を重ねる必要があろう。

出土遺物では、サヌカイト剥片が大量に出土しており注目される。調査区付近で打製石器の製作がおこなわれていた可能性が考えられ、四分遺跡の集落構造の復元に貴重な知見を加えた。（清野・張）